

---

# 魔法少女リリカルなのは 光と闇の少年

zero-i2

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 光と闇の少年

### 【Nコード】

N8392Y

### 【作者名】

zero-i2

### 【あらすじ】

JS事件より3年、当時の関係者がある事件に巻き込まれている頃、クラナガンでは連続殺人事件が起こっていた。

そんなある日、一人の少年が事件に関わっていくそんなお話。

## プロローグ(前書き)

はじめましてzero-i2といます

小説を読むのが大好き、の割には文才が無いzero-i2でございますw

まあ長い前置きは苦手なのでさっさと始めたいと思います。

では、魔法少女リリカルなのは 光と闇の少年 始まります

## プロローグ

雨振る中、鉄の音が響き会う。

「だめだ、お前のそのまっすくな剣を憎しみで、血で染めてはだめなんだ!!」

お互いの技を、意地を、思いをすべて剣に載せぶつかる。

「そんなこと知るものか、能天気で本当の悲しみを知らない貴様に言われる筋合いは無い!!」

人には譲れないものがある。互いが本気なら反発し合い、それは喧嘩へとつながる。それは大きかれ小さかれ人を想えば必ずおきることだ。

二人は距離をとりそれぞれの武器を構え、そして再びぶつかる。

「このわからずやがあ!!」

「どけえ!!」

そして剣は交わる。

## プロローグ（後書き）

・・・どうでしたでしょうか

・・・え？今のじゃ全然わからない？  
当然でしょう

私もわからないですからw

まあ、今後は仕事とゲームとゲーム（エロ）と読書の合間に書いてく感じなので不定期更新になりそうなのは見えてきております。

???「更新安定させて何ほの世の中じゃないのか？」

わかっていきますよ。だって仕事忙しいだもん

???「だったら俺が変わりに・・・」

というか本編まだなのに勝手に出てくんや。

???「（、。、。、）」

前書きでも言っていました、自他共で文才がありません。  
何か指摘がありましたらどんどん言って下さい。

・・・へこむかもしれないですけどw

一話 転校生（前書き）

えー第一話投稿しました。

しかし、短い！！えー短いです（、；）

???「ついにおれの出番か」

ふん、貴様なんぞサブで十分だ

???「んな（。°）！」

????「むしろモブキャラで十分だろ」

あんただれ・・・（；、）

てことで（どういうことで？）魔法少女リリカルなのは 光と闇の

少年

始まります

## 一話 転校生

ひとつの村が燃えていた、竜による突然の襲撃、逃げおおせる人々は程なくして竜に狩られる。

普段は穏やかなはずの彼らは、圧倒的な力で村人たちを残虐にも引き裂いていく。

あるものは胸をきりさかれ、あるものは魔力によって蒸発させられ、あるものは生きたまま食され、そしてあるものは・・・

そして、それらを指示していると思われる一匹の竜がある三人をにらみつけていた。おそらくは親子と思われる、子供のほうはまだ幼さが残っているように見え、夫婦はそんな子供をかばうように立っていた。

しかし、そんな夫婦もまた圧倒的な力で消され、子供を残したその場には守るものがなくなった。子供は両親が殺されるところを目の前で見せ付けられ声を張り上げて泣いた。もちろん竜は子供が泣こうが喚こうが関係がない。リーダー格たる竜はその刃を振り下ろす。

刹那、子供から一筋の光が立ち上り、村を覆った。

.....

ミッドチルダ地上本部を震撼させた、古代ベルカの遺産、ロストロギア「聖王のゆりかご」、それを操り世界を我が物にしようとしたスカリエッティ一味が引き起こした、通称：レリック事件、ジェイル・スカリエッティJS事件から3年の月日が流れた。

当時の当事者たちは今は自分の夢へとまっすぐに進んでいた。

そんな前置きは置いておいて、今回の主人公はザンクトSt・ヒルデ魔法学院へと転校（転院？）することになっていた。

初等科6年ではそのことはすでに、噂が流れていた。男なのか、

女なのか、美少年？美少女？・・・全部性別じゃん（、、；）  
ツコホンともかく、転校生が現れるとよく流れるような根も葉もない噂ばかりだ。

もちろん、噂を気にするやつもいれば気にしないやつもいる、アインハルト・ストラトスもそんな気にしない人たちの一人だった。碧銀の髪と青と紫の虹彩色の瞳が特徴のちよつとクラスでは浮き気味な女の子である。いわゆる美少女だけど話しかけづらい存在。

彼女の場合はそういった話をするような友達がいないので、聞かえてくる話から転校生が来るということが噂になっているのを知っている、その程度に認知していた。

「相変わらず・・・」

相変わらず噂好きのクラス。彼女からもクラスに自ら溶け込もうとしたことはない。先生たちからももう少し仲のいい友達とか作らないのか？とか聞かれたこともあったが、そのときでも2つ返事で答えた。

そしてチャイムが鳴り皆が席へとつく。このクラスの先生は時間にはしっかりとしており、いつもチャイムがなり終わるころに教室へと入ってくる。そして始まる日常。

しかし、彼女の日常に先生から一石投げられることになった。それは・・・

「えー今日はこれからみんなと勉強を共にすることになった、転校生を紹介する。ウイリス君入ってくれ。」

そういうと一人の少年が入ってきた。その少年は長袖をきていて黒髪に黒色の瞳、右眉に縦に傷が入った人だった。

そう、それは一人の少年が石となり私の日常に波紋をよせた。



## 一話 転校生（後書き）

えーどうでしたでしょうか

地文ばかりの駄文になってしまいましたw

ウイリス「どういうことだ！！主人公なのに登場シーンだけとは」

今後はどんどん台詞を増やして行こうかと（ー、ー、）キリッ

ウイリス「つまり私の台詞も必然的に増えてくると」

・・・無視したつもりだったのに食いついてくるとはorz

とにかく感想等あったらお願いします。

アドバイス？当然というかあったらどんどんください

## 二話 最近の幼子はなかなか・・・(前書き)

前回読まれた方一週間ぶりです。

今回が初めての方はじめまして。 zero-i2でございます。

・・・思ったより早く終わった~~~~)。。。) 旦那 チャノメヤ

ってことで、第二話書き終えたわけなんですけど、やっぱり短いなww

ウィリス「よーやく俺の出番なんだな」

いやはや、貴様に出番が来ると思っているのか

ウィリス「いやー、出なきゃおれ主人公じゃないでしょ」

貴様に朝日は拝ませねえ〜!!

ウィリス「。。。)」!

ということど(ど)ういうことど? (では第二話  
光と闇の少年始まります

ウィリス「( ^^ )・・・絶対出てやる」

## 二話 最近の幼子はなかなか・・・

ここ、初等科3年の総計31名+1名のクラスはすごく元気のよいクラスである。

「きりーっ、きおつけ、れい。」

クラス委員の子の号令でみな同時にお辞儀をしてクラス全員の元気のよい声が合わさる。

「さよーなら」×31

突然だが、終礼が終わると同時に、カバンに手を取って一気に駆けていくクラスの男子を見たことがあるだろうか。いや、別に女子でもいいわけなんだが、とにかく見たことがあるだろうか。

かくいう私も子供のころは早く遊びに行きたくて、礼したら速攻で廊下を駆けて行ったわけなんだが・・・。

正直な話ゆっくり行きたい人からしてみたら、ぶつかるときもあるんだからもっとゆっくり行けよ（ちなみに私はこれも経験済み）  
「、、（キリッ）」といたくなる。

なぜ、このような事を言い出したかというと、だ、もしも、そう、もしもクラスの半分以上がこのような状態になったらどうなるでしょうか・・・答えは足し算よりも簡単、出入り口はカオスと化すだろう。

それだというのに、この初等科3年のクラスは全員、いや訂正、

出入り口付近にいるクラスの一割の生徒を除いた生徒たちが一気に  
なだれ込んで行く。

いや、この光景はなかなか見ごたえのある、眼福眼福。

「ひにゃ〜」

そうして、クラスには先生を含め4人残る。先生はすぐに廊下に出  
て、かけていった生徒たちに「廊下は走るんじゃありません」と  
と大声で注意を促していた。

「だ、大丈夫？コロナ？」

「う、うん、ありがと、ヴィヴィオ。」

「みんな相変わらずだよね。」

「うん、それじゃいこっか。」

そういつて残っていた3人のうち2人も廊下を出て、帰路へとつ  
いた。そうして後ひとり、リオ・ウエズリーが残る。

えー、一応言っておこう、先生やヴィヴィオたちは決してリオの  
ことを無視したわけではない。たまたま、リオは一番後ろの教壇か  
らや、ヴィヴィオとコロナの位置からはすぐ見づらい位置で転ん  
でしまい、誰にも気づかれずにいた。

しかし、この転んだときのスカートがめくれそうのでめくれない、  
だが角度と距離を変えればその中が見えるのもどかしく、しかも  
幼い少女で短髪、アホ毛つきのオポジションがついた元気っ娘が頭の  
打ったところを擦りながらも、誰もいないということもあってか、  
ただ単に気づいてないだけかは置いておいたとして、スカートが捲  
れそうになっていることには気にも留めてもいないその姿は眼福だ

のうイエ  
、（。人。）ノ  
イ！！

「あいたた、つてもうみんな帰ったの!？」

クラスに誰もいないという事実を知らされた彼女は軽くカルチャ  
ーシヨックを受けていた。しかしめげない少女、とりあえず立ち上  
がり誰もいないというのに気づきながらも現状の自分の格好にはず  
かしみを覚え顔を赤くしてスカートを直す。

「つ~~~~~~~~、と、とりあえず図書館行こ、うん／／／／」

そのしぐさは、本当にかわいかった。もうおしたおし・・・じゃ  
なかった。初めてのお使いで出てくる子供のようにみえた。

図書館に行くまでのあいだ彼女はトレーニングの一環でランニン  
グをしていた。無論校内を走るのはあまりよろしくないというのは、  
彼女自身よく知っているし、普段は守っているのだが、図書館に行  
くとき、正しくは学校が終わってから一人で行動するとき、暇で  
暇で仕方ないからとりあえず走っているような感じになっていた。

「さて、本あさりでもはじめますか」

着くと早速目新しい本を探し始める。目新しい本を見つけると次  
には授業で分らないことや、知った知識を深めるためにその関連  
の本をとって行く、普段なら3、4冊くらいで済むのだが、今日は

特に読みたいと思った本が多く、自動的に山ずみになった。

「とつとつと、流石に多すぎたかな。よっと」

崩れそうになった本を少し反動をつけてバランスをとった。そして、最早いつも自分の専用の席となりつつある、外の眺めがいい席へと歩を進める。

そうして、階段へと差し掛かったところでバランスが少し崩れた。

「っよ、ってあれ？ちよま」

しかし、一度崩れたバランスは取り戻せなかった。そのまま重力にひかれ、階段の下へと引き釣り込まれて行く。

(もつだめ!！)

そう思って来るべき衝撃に備えて目をつむり、頭から落ちないように首を前へと折る。

・・・そして、来るべき衝撃は来なかった。

「・・・ん、あれ？」

リオは、思ったような衝撃はこず、目を少しずつ開けて周囲を確認するかのようにキョロキョロする。そうして見上げると一人の少年が立っていた。

「・・・フー、ぎりぎりセーフだな。まにあってよかったあ。」

安堵から来る声なのか、ものすごく間抜けにも感じた。しかし、リオからしてみたら、彼は白馬の王子様にも匹敵するかもしれない、ある物語の主人公におもえた。

だから聞く。

「あなたは・・・」

自分の王子様になってくれるかもしれない

「あなたの名前は」

彼の名前を

二話 最近の幼子はなかなか・・・(後書き)

ウイリス「ハハノ イヤッホーウ！」

己貴様は勝手にしよってからに

ウイリス「出番くれないから勝手に駆けつけた、だが後悔はしない  
(ー、ー、) キリッ」

きさまああ・・・。生かして帰さん！！

ウイリス「(、、;)」

ジェノサイドブレイバアア

ウイリスは文字通り光となりました。

えー、遅くなりましたがどうでしたでしょうか。

感想、訂正、アドバイス、その他もろもろありましたら  
どんどんくださいませ。

????? 「僕からも頼む」

前回から気にはなっていたが本当にあんた誰？



## 真1話 友達百人できるかな (前書き)

お久しぶりです、zero-i2でございます。

いやー、皆さんのアドバイスのおかげで多分だいぶ改善されたと思います。

ウイリス「ふふふ、ついに俺の時代が来たか」

てかあんた主人公でしょ、何言ってるの？

ウイリス「いや、だって俺を出さないとかどうとか……」

ああ、出たくないならいいや、ほか代役回しとくし……

ウイリス「いえ、やらせてください」

……何という変わり身の早さだ。ww

今回は少し長くしてみました、これくらいは短い、とおいでの方もいるでしょうけど今の私はこれが限度なんですw

ではでは、魔法少女リリカルなのは 光と闇の少年 始まります

ウイリス「そういえばタイトルの『真』って？」

読めばわかるさ、第一文目でww

## 真1話 友達百人できるかな

これはSetザンクト・ヒルデ学園に転入一週間ほど前の話だ。

「ウイリス、突然だがお前そろそろ学校に行ってみたいと思わないか」

「つぐ・・・ふう、な、なんだ？ほんとに突然だな」

親父は何の脈絡も無く本当に突然、しかも、おれは絶賛腕立て伏せを200回突破した頃にしゃべり始めた。

「いやなに、今の生活にもだいぶ慣れてきた頃だしな、そろそろ年相応に学校に行ってみたらどうかと今思いついた。ほらペース落ちてきたぞもっとペースを上げんか」

おれは、歳のには初等科の最終学年くらいの年齢になるんだが、ある事情により学校に行っていないかった。だけど、半分は親父のせいだぞ。いろんな世界を飛び回るものだから、落ち着いて学校に行っている暇すらない。

・・・まあ、そのおかげでいろいろ解決したこともあるんだがそれを今は語るまい。

そんなこんなではあったもの、ここ二週間ようやく根無し草状態を脱出することができた。

しかし、しかしだ、わざわざこんなときにしゃべってこなくてもいいじゃないか。

「よく言うだろ、時は金なり、てな」

「う・・・ぐ、ぜえ、はあ、ひ、ひとの、ここ、ろが、ぜえぜえよ  
むなよ」

あ、いま300回突破した。

「お前の心が読めなくて何が父親だ、こら！！かってにてをとめる  
な！それで行くのか？行かないのか？」

親父は二つの選択肢を用意した。おれは漸くの学校だ。もちろん  
行かない手は無いだがここでおれはあえて反対の意見を言うてみる  
ことにした。

「そ、それじゃ、いか・・・」

「ちなみに、行かないと選択を選んだ場合は学校まで強制連行、そ  
の後にトレーニングのメニューの3倍くらい増やすからな慎重に選  
べよ」

「行かさせていただきます！！」

い、今の3倍だなんて死んじやうよ。てか、選択肢無いじゃない  
か。まあ学校には行きたかったしぜんぜん問題ないんだけど。

「そうか、そんなに行きたいか」

「はい...っく、350...」

今日は350回を三セットやれば終わりとなっていて、ようやく三セット目のラストが終了…

「そんなお前にあと150回やることを命じる」

しなかった!?

「ちょ、鬼!!!いじめ!?!この悪魔!?!」

「hahaha、知らんわ、口動かしている暇あればおととせることだな」

くそ、覚えてろよ。と、おれは心の中で密かに思っておくのであった。

「言うておくがただ漏れになってるからな」

「な、んだ…っ」と

っく、全部口から出ていたなんて…

あと、98回

「も、もつげ…げんか…い」

「ほら、あと200回だぞ、がんばっ!」

って増えてるし!?

今日はいよいよ、俺の学校でビューの日だ。って別に殴りこみに行ったり、窓を割ったりするわけじゃないんだぞ。

・・・俺誰に言い訳してんだろ。

改めて、今日はいよいよ、俺の学校でビューの日だ。そして俺は今、自分がこれから一年くらい学んだり、クラスの同年代の子と他愛も無い会話をしたり、とにかく、俺が今まで経験したことのない領域クラスの目の前にいた。

俺の担任になるであろう先生とここにきて、「しばらく待っているように」といつてこうして待っているわけなんだが、すごくどきどきしてきた。

挨拶はどうしようか、とか、俺の格好に不自然なところは・・・まああるんだが無いか、とか頭の中ではそんな思考をぐるぐると回転させている。

そうしていると、先生から声がかけられた。

「えー今日はこれからみんなと勉強を共にすることになった、転校生を紹介する。ウィリス君入ってくれ。」

オレはそう言われると扉に手をかけた。この先にオレの新たな1ページが始まると思うと手から汗が出ているような気もした。そして扉を開く。目の前に広がるのは、これからオレの生活の場所になるクラスメイト達だった、そしてそれらの視線はオレに集まっていた。

オレは教壇へと登り先生から渡されたチョークを渡された名前を

書くように言ってきたのでチョークを手に、黒板に自分の名前を書き、体の向きをこれからクラスメイトになる仲間達の方へと向く。

一瞬皆から集まる視線に少しびびってしまい息を飲んでしまう。深呼吸、深呼吸、息を大きく吸って吐く、これだけでも大分変わるものだ。改めて皆の方を見て挨拶することにする。

「オレはウィリス・リュウドウ、ちょっとした諸事情があつて今まで学校に行っていなかったため分からないことは沢山あると思います。」

一拍置きもう一度軽く見渡してから最後まで言い切る。

「オレはみんなと仲良くしたいのでいろんなことを教えて下さい。よろしく願います」

親父から、友達を作りたいのであれば、これからの意思表示は大事と教わったから言ってみてみたが……、だ、誰も反応しない!?

そんな馬鹿な、また親父に騙されたというのか、と内心落ち込みはしたが別に最初から友達ができるとは思っていた。むしろ、なかなかできない方が、燃えてくる。

…たぶん落ち込むけどね。

「…ウ……ス…君、ウィリス君」

「は、はい」

どうやら、俺が考えている途中から呼ばれていたらしく先生が大きな声で呼んできた。そして、俺が気がついたこと確認してある空席を指差した。

「君の席はあそこだから、えーと、隣は・・・と、アインハルトだな。アインハルト」

そう呼ばれると一人の少女が立ち上がった。その子は銀の髪と青と紫の虹彩色が特徴的のきれいな子で、その凜とした姿には見入ってしまう魅力を感じた。

「はい」

「学校は始めてとのことだ、いろいろ面倒見てやってくれ。」

「わかりました」

そういうと、アインハルトは自分の席へと座る。先生はその態度を見て頭をさすり少しだけ苦笑いをする。おそらくは、先生を困らせるような問題児だから、とか何か理由をつけて彼女に俺を当てたのではないかと思うんだが・・・、とても問題児には見えない、てことは逆に優等生過ぎて人当たりが悪いとかそんなところだろうか。

ともかく、俺は自分の席へと向かった。まだ視線を感じるが、まあこの前見た漫画に比べれば全然ましかな？

前見た漫画なんか、転向してきて自己紹介した瞬間に、その転校生は囲まれて質問攻め、もちろん転校生は慌てふためくしかなかった。俺は一応その本を元に予行練習をしてきたのに、必要なくなつた。無いほうが助かるし、っと、ちょうどアインハルトの隣の席

に到着する。先生が俺を任した人だ。お世話になるんだからとりあえず挨拶しておくか。

「初めましてアインハルトさん、これからよろしくお願いします」

よし、完璧な挨拶だ。心の中でガッツポーズを取ったのは内緒にしてもらおうか。しかも笑顔のオポジション付きだ。これ以上の挨拶は無いだろ、そう思えた……んだが、

「……………」

む、無言、だと！？何がいけなかったんだ！？俺は授業が始まっ  
てからもずっと考え込んでいた。

あれだ、きつとアインハルトさんは恥ずかしがり屋なんだ。もしくはファーストネームで呼んだのがいけなかったのか、次からファ  
ミリーネームで呼ぶか。確かストラトスだったな。

この結論に至るまでに一時間目をぎりぎりまで使ってしまった。  
当然授業の内容なんて覚えていない。だが後悔はしない、授業終わ  
ったらすぐに声を掛けよう。そしてそのタイミングは直ぐに訪れる。

チャイムがなり、先生が立ち去ったのを確認して、隣のストラト  
スさんに声を掛け、とりあえず無視されるのだけは避けよう。

「スト……」

「リュウドウ君って何で今まで学校に行ってなかったの？」

だが、いきなり現れた一人の女子生徒によってその言葉を阻まれ  
て、俺は少し女生徒から一歩引くような形になってしまった。



「え、あ、いや、お…父さんがいろんな次元世界に飛び回っていたから行く…」

「お父さん何の仕事してるの？」

そうするとさらに反対側からに男子生徒がにゅ、と擬音が聞こえてきそうな現れ方をして少し驚いてしまい、そっちの質問に答えてしようとしてしまう。これが失敗だった。

「ふえ！？あ、いや管理局で…」

「勉強大丈夫なんか？今まで学校行ってなかったて、いつていたけど」

「得意なスポーツなんか無い？僕は徒手格闘技ストライクアーツなんかやってるんだけど」

「嫌いな食べ物？」

「好きな…」

次から次へと、我さきへと質問してくるようになってしまい一人ひとりの言葉が聞き取れないほどに飛び交ってきた

な、何なんだこの質問の嵐は！？俺の予想は朝転校の挨拶の時にされるかと思っていたのに、今来るなんて。

俺は突然の事態に対応仕切れず、質問の嵐に吞まれて行く。くっ、コレが転校生の試練だというのか。

そうやってされるがままになっていると、隣の席から助け船が出された。

「皆さん、リュウドウさんが困ってますよ。」

その一言で飛び交う言葉はピタリ、と止まる。

「質問は一人ずつ、別に時間がなければ昼休みまた聞けばいいだけなんですから、少し落ち着いたらどうなんですか？」

全員言葉を失ったかのように沈黙が数秒の間続いた。まるで時間が止まったかのような感覚さえ覚えてしまうような、そんな感じ、ストラトスさんは、静かになったのを確認したら静かに席へと座りなおす。

ストラトスさんのおかげで俺も一息つくことが出来たが、この沈黙は耐え難く、先ほどの質問に答える事にした。

「えっと、最初の質問なんだが、父さんが仕事の都合でいろんな次元世界を飛び回っていたから行く機会が無かったんだ」

「へ？あ、ああ、そうなんだ、じゃあリュウドウ君はお父さんと一緒にいろんな世界に行ったことあるんだ」

結局この時間にストラトスさんに話しかけることはかなわなく、ただ彼女ののおかげで窮地を脱することができたことから、悪い人でないことだけはわかった。

新学期が始まったばかりであることに、今日は午前中で授業を終えた。終礼を終えるとクラスメイト達は次々へと帰っていき、俺もかばんに荷物を入れ帰る準備をしているところだ。

「ねえ、リュウドウ君一緒に帰らない？」

先ほど真つ先に俺の所へと質問してきた女子が声をかけてきた。たぶん交友を育みにきたのだろう。だが俺にはまず最初にこなさなければならぬ事があつたため、彼女の誘いを断ることにした。

「ごめんな、ちょっと今日は別にやることがあるからまた今度な。」

「そっかー、残念。」

彼女は軽く一言だけ言っておそらく待たしていた友達のところへと向かった。

「じゃ、またあしたー」

俺は手を振って彼女たちが帰るところを見送った。さて、俺は今日の目標を達成させるぞ、と隣の席を見てみると、そこにはすでにストラトスさんがいなかった。見渡すと彼女はすでに、教室を出ようとしているところが見えて、あわてて鞆に荷物を詰め込んで彼女の後を追った。

走って追いかけていると先生からの注意をうけ、余計時間がかかってしまい、校門に差し掛かったところでようやく追いついた。

「まってー、ストラトスさん」

呼びかけると、足を止めて振り返ってもらえた。その行為のおかげで校門を出る前に追いつくことができた。

「リュウドウさん？どうしたんですかそんなに慌てて」

「いやー、ストラトスさんにまだお礼を言っていないかったから」

「お礼？」

彼女は本気で思い当たる節が無いように聞き返してきた。多分彼女にとってあれは当然の行為なんだろうが、それとも、ただ単にうるさかっただけとか、それはないか、俺は少し苦笑いしながら彼女の問いに答えた。

「ほらさっきの、最初の質問のときの」

ストラトスさんは少しあごに手を当てて考えるように少しうつむく、そしてわかったのかすぐにはっとした顔をした。そして、顔を上げて凜とした表情へと戻る。

「ああ、先程の、それならお気にしないでください。うるさかったから言ったまでです。」

「・・・まじで？」

「はい」

俺の冗談の考えが的中してしまった。べ、別に俺のためにとか勘違いしたんじゃないんだからな、そ、そこを勘違いするなよ。

「ま、それでもさ、結果として俺は助かったんだしお礼くらいいわせてよ。ありがとう」

「どういたしまして、では私はこれで」

礼を言ったら彼女はすぐに帰路へ戻ろうとしたが逃がしはせん。今日の目標はまだあるんだ。それを達成しないことには帰したまえるか。たまるかよ。

「ちょっとまって、ストラトスさん」

彼女はすぐに降りたかったのか少しため息をつきながらこちらに再度振り返る。

「なんですか？また」

「いや、特に用事が無いならさ、いろいろ教えてほしいなって思っ  
てさ、その、一緒に帰らない？」

俺は少し緊張しながら言う、なんていうか、ストラトスさんって大人っぽくて綺麗だからこういう風に誘うだけでも重みみたいなものというか、プレッシャーを感じる。だけど、俺は確信している。彼女を友達にすることができれば、ほかのクラスメイトとも友達になれる気がする。

最初に教室に入り、自己紹介とともにいった言葉ではないが、友達には、必ずグループが存在する。大きくいえば男子と女子、アウトドア派とインドア派、だから全員と友達になろうと思ったらず、そのグループの輪から崩さなきゃならない。だが、ストラトスさんだけそのどの輪にも入っていない気がした。そういう人たちは、自分から入らない人と入れてもらえない人がいるわけなんだが、後者のほうは逆にグループを崩してからじゃないと友達にすることは難しい。だけど、ストラトスさんの場合はどう見ても前者だ。そう

「いう人は友達に後からなろうとしてもほぼ無理といってもいいだろう。」

「だけど、そういう人を友達にすれば他のグループの輪を崩しやすくなる。無論、難易度は高いけど成功すればその後の自信にもなる。」

と、『友達を作ろう大百科』という本に書いてあった。

そういう思想があったわけなんだがストラトスさんは、

「別にいいですけど、だったらさっきの誘われたときにそちらいけばよく無かったですか？」

「ぐふお、さすがストラトスさんだぜえ、痛いところをついてきた、俺の精神ポイントにクリティカルヒットした。というか、さっきの見てたんだ。だが俺はめげずに友達にしてみせる。てか、一緒に帰ろうだけじゃわかりずらいかな。よし、だったら直接言ってみるとするか」

「あー、その、なんだ、君と友達になりたいんだ。だから付き合ってくれないか。」

なぜかストラトスさんは急に顔を赤くして慌てふためいていた。周りの下校者も小さく笑いながらなぜかこつちを暖かな眼で見ている。なぜなんだ、誰か答えてくれないかな、おーい。

「り、リュウドウさん、そんな、こんなところで」

「だめ、なのか？」

「い、いえ、その、こちらこそお願いします」

周りからはなぜか拍手があがり、ストラトスさんは相変わらず頬を紅潮させたままだが。こうして俺の友達第一号ができた。

真1話 友達百人できるかな (後書き)

ウィリス「結局ストラトスさんどうして顔あかくしてたんだろ？」

それは自分の言葉をもう一度言ってみるんだな

ウィリス「君と友達になりたい？」

・・・もついいや

はい、どうでしたでしょうか、  
実質これが一話になります。

今までの？プロローグですw

で、三人称にしてみました、どうでしたでしょうか

今後も改善していく所存ですので感想ばしばしください。

では、また次回



## 第2話 その裏では・・・（前書き）

皆さん、明けましておめでとございます

すでに呼んでいただいている皆さん、今年もよろしくお願ひします

今回が初めての方は今日より一年駄文ではありますがお付き合いよろしくお願ひします

はい、では今回はウイリスがアインハルトに告白（ウイいやちが・

している裏側では何があったか、そんな話です。

ウイリス「え、・・・てことは俺の出番は？」

当然ねえよ

ウイリス「。。。。」

ではでは、魔法少女リリカルなのは 光と闇の少年 始まります

## 第2話 その裏では・・・

「いやー、あなたが来るなんてねえ、どついう風の吹き回しなんだか」

ここSt・ヒルデ学園校長室、ウィリスの父、イツセイは目の前の初老の人物に用があつてこの場に来ていた。

「そんな事言わないで下さいよ。カレン先生…」

「学園長ですよ、今は」

「おっと、失礼しました学園長先生」

くっ、と笑いを漏らしながら皮肉気味に言う。言うまでもなくカレンは少しむくれた様にするが、これで終わる彼女ではなかった。

「毎年、同窓会だけでも出るように言つたはずですよ、リュウドウ執務官殿」

言わずとして彼女から笑みがこぼれる、今度はイツセイがむくれた。しばらく沈黙が続いたと思えば両者から笑いの声があがった。

「こつというのやめませんか？」

「そうですね、昔の様にしますか。」

お互いからは笑みが出てくる。皮肉を言い合うもお互い信頼して

いるかの様な雰囲気であつてその皮肉ですら普通の会話に聞こえる。

「しかし、同窓会には出席するようにしなさいと、言つてあつた筈ですよ。」

「勘弁して下さいよ。オレが最近まで根無し草だつたのはご存じでしょう。」

「そうでしたね。日々多忙なのは、まああなたの地位を考えたら当然のことですね」

そう言つてお茶をすすり、少しだけ間を空ける。皮肉を言えるだけまだまだ若いなと思つたが、こういうしぐさが歳を感じさせていた。

「それで、そんな多忙なあなたが今日は何の用ですか？」

少しだけ皮肉氣に言つた学園長に対して、彼はこの質問に少し真面目な顔になり、カレンもそれを察して、笑みを消し、相談を受けるものとしての顔へと変化する。

「今日、転入してきた生徒がいるでしょう、それ私の息子なんです。」

「なにを当然な事を……」

カレンは言葉を止めて少しだけ、考えた。

今までの流れで彼と彼女がかつての先生と教え子だったことは見えているだろう。カレンは先生方の中でも生徒からの相談役として、

輝いていた時期がある。無論イツセイも例外ではなくカレン先生にはいろいろな（押し売り）相談をして、それは、イツセイが卒業してからもよく相談するため（させるため）に彼女の元へと（力づくで通わせた）通ったものであった。

・・・ほとんど力づくで聞き出していたのは内緒だ。

そんな、信頼<sup>むじやう</sup>して全ての相談を受けていた彼女は少し考えただけで彼が言わんとしている事が分かった。分かったからこそ彼女は聞く。

「そつえば、あなたまだ……」

「ええ」

イツセイもまた、カレンが聞いてきた言葉の意味を最後まで聞かずに悟り、一言だけで返事をした。そして、イツセイは鞆の中から一枚の書類を取り出した。

「これは？」

「ある事件の資料です。実は今日は仕事と私用の両方の用件があった訪ねたのです。」

「？これと何か関係あるのですか？。」

当然の質問だ、これでは息子の件との関連性が見えてこない。

「ええ、まあ私用のほうでちょっと」

「ああ、ちょっと待ちなさい」

カレンはイツセイのお茶が冷め切っているのに気が付き、そういうや立ち上がり、イツセイの湯呑と自分の湯呑、両方を持って行きポットのお湯を注ぐ。部屋にはお茶のいい香りが漂った。注ぎ終わると湯呑をそれぞれの場所に置き、再び席に着く。

「お待たせしました。では、話の続きを、」

「ええ、ではまずは仕事の方からはじめます。」

そういって、机の上に置いた書類をカレンの見やすい位置へと移動させて、カレンは眼鏡をつけてから書類を手に取り、目を通す。

「これは・・・、最近クラナガンを中心に起こっている連続殺人事件の、ですか？」

「はい、まだ公になるほど大きな事件にはなっていないのですが、やはり皆この状況の中、一般の守られる側の人たちを夜遅くまで外にいるのはどうなんだ、という意見が多くて再度呼びかけているんです。」

この件を持ち出したのは今回が初めてではなかった。しかし、少しずつ肥大化して、事件の解決がなかなか見えてこず、もう一度呼びかけをしていた。

他の場所でも、同じように書類を渡し同じような説明をしているであろう。

「実を言えば、あちこちの次元世界に飛んでいた私がここに根を下ろした理由として、上の方たちが早期解決をするために召集したのがきっかけなんです。たぶん他のフリーの魔導師も召集を食らって

るんじゃないですかね。」

少しだけ自嘲気味に笑みを零した。そこには、やっぱり皮肉が込められていたのは言うまでもない。

「まあ、そのおかげで息子も学校に通うことができるようになったんですけどね。」

「ふむ……。分かりましたでは、今日終礼時にでも先生方を通して生徒たちに伝え、先生方も残業をなるべくさせずに帰させましょう。」

「理解が早くて助かりますよ。」

広げた資料を整いなおして封筒にしまい、最初に出した書類だけカレンの前に残した。

「いえいえ、それより私用とは？」

少し気が楽になったのかお茶をすすり、張り詰めていた空気が幾分か和らいだことを見計ってから次のことを言う。

「そつちの件と重なっているんですけど、俺は事件の早期解決を目指して家を空けることが多くなるんですよ。もしも先生がよかったら息子をかげながら見守ってやってくれないでしょうか」

何を言うかと思っただら普通の、父親としてのお願いだった。カレンもそのギャップに対して湯呑を落しそうになった。

「……なんとというか、あなたからそんな言葉が出る日がこようと

は……。」

「意外でしたか？」

「いいえ、確かに驚きはしましたが、意外、ってほどではないですよ。」

学生の頃から彼を知る彼女ならでの言葉だった。こういうのはあれなのだが、イツセイは学生の頃からいろんな世界を放浪する癖があり、なんでもひとりでやるが多かった。親が幼いころに他界した事もあったのだろうが、あまりにもその歳相応の態度ではなかったというか、他人に頼ることを知らない人、という言葉が一番似合う子供「イツセイ・リュウドウ」といっても過言じゃない程であった

「そんなあなたが、こういう風の吹き回しなんでしょうか？」

人に頼る事の無かったイツセイが、まして身内のことで頼ってきた事には本当に驚愕していた。

「俺も人の子だと言うだけです。カレン先生」

お茶に口を付けて、まったりとした表情をしてから、少し悲しげな顔をした。

「人ひとりでは出来ることは少ない、確か先生が俺に言った言葉ですよね？」

「ええ、あなたは昔からなんでも一人でこなして、一人で全て出来ると勘違いしていたから言いました。」

今こうして頼っていることはいい傾向と言える、が同時に昔を知るのがカレンは歪に感じる。少しお茶を飲み落ち着きを取り戻す。落ち着いているように見えはしたが、内面では心臓が止まってしまっているのではないか、そう思えるほどに驚いていた。表面だけでも落ち着いているように見えたのは年の功であろう。

「ここ最近になって、ひどくそう思える出来事が起こったんですよ。そう思うと今までの俺が馬鹿らしく見えたというかなんと言っか、  
・ ・ ・ そんな感じですよ」

友人の死、自分を信頼してくれた人への裏切り、他人はそこまでひどく思っていないことでも彼自身そう、思ってしまうことがここ、十年近く何度も起こった。

人の人生に換算するとそんなんに最近ではない気もするのだが、彼は最近と言ってしまっうほど、最近の出来事のように記憶を鮮明に蘇らすことができてしまっうほどの出来事。

彼はそんな、一言では片づけられないような事を最近と言い表した。

「とにかく、あれは、俺にはもつたいないくらい良い子なんです。  
・ ・ ・ 頭のほうはちょっとあれなんですけど、それでも、将来的にはエースオブエースや、ハラオロンとこのやつらと肩を並べるかそれ以上の才能を秘めてるんです。」

ひどい、と言ってしまえるほど馬鹿親だった。言ってる本人少し恥ずかしそうに言ってるるところからすると自身も分かって入るのだろう。この態度は流石のカレンも予想していなかったのか、表情に堂々と驚いていると、書かれていた。

「だから、俺が見ていられる時間が減る分、先生に見てもらい



たいんですけ……ど……、先生？」

カレンは少し放心している様子だった。驚いていたのは最初からだったんだが、途中から処理しきれなかったんだろう。それでも、すぐに我に返りお茶を飲み干した。

「だ、大丈夫ですよ。分かりました、私も忙しい身ではありませんが、できる範囲でよければやらしてもらいますよ。何より手塩をかけた教え子の頼みです。断る理由がありませんよ。」

「ありがとうございます。」

お茶を飲み干すとすぐに立ち上がり、持ってきた荷物を鞆へとまとめる。

「もう行くのですか？」

「ええ、この後、息子のデバイスを取りに行かなきゃならないので、それと仕事」

あくまで仕事はついぞと言わんばかりの物言いに、カレンは微笑をした。

## 第2話 その裏では・・・（後書き）

はい、短いながらも駄文をお楽しみいただけただけでしょうかww

ウイリス「今回ほんとに俺の出番無かったな。てか親父普通にいい人だし」

しまった!？

ウイリス「そっかー、俺親父をばぶう」

貴様があの一面を知ると後々書きづらんだよ。大丈夫、記憶を飛ばす程度で叩いただけだからww

ウイリス「・・・ふあれ?ここはどこ?私は誰?」

む、飛ばしすぎたか。

・・・ま、いつか。

ではでは、また次回

ウイリス「おれは、わたしは、ボクハ・・・」

大丈夫かなあ( ; \_ ; )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8392y/>

---

魔法少女リリカルなのは 光と闇の少年

2012年1月1日01時51分発行